HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	乳児の気質的特徴の構造についての実証的研究 : 恐れ，怒り，快の表出傾向の関係
Author(s)	星，信子
Citation	北海道大學教育學部紀要，64，89-92
Issue Date	1994-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29439
Type	departmental bulletin paper
File Information	64_P89-92.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

乳児の気質的特徴の構造についての実証的研究

——恐れ，怒り，快の表出傾向の関係——

星　　信子

The Structure of Infants Temperament : Individual Temporal Patterns of emotional expressions in Fear, Anger & Pleasure

Nobuko HOSHI

(1) 問題及び目的

気質という用語は，情動的表出や刺激に対する反応傾向における個人的特徴を指す用語である。気質は個人差に焦点を当てる概念であるため，子供自身の特徴が発達に寄与することが見直されて以来，発達研究における気質概念の有用性が見直されて来ている。しかし，気質の起源，構成要素，測定方法，研究対象などは研究者によって異なっており，現在でも気質という用語に対する共通の定義はまだなく，それぞれが独自の定義により研究を行っている状態である。このように概念自体がまだ未成熟である場合には，概念の構成要素，次元などについてさらに検討を加え，概念の構造をさらに洗練する必要がある。また，現在までの気質研究の視点は，気質概念の下位次元及び被験者グループの関係に向けられて来ているように思われる。測定された表出の単位は個人であるが，実際に個人がもつ気質的特質や，その個人内に於ける関係を扱った研究は皆無である。従来の研究では個人を単位にした気質的特徴の捉らえ方はない。

情動性は，気質研究者のほとんどが扱っている主要な気質次元の一つである。情動性は情動の形式的特徴（強度，速度など）や情動の質などにおける個人の特徴を指す用語であり，情動を特徴づける最も一般的な用語である。この情動の個人差を気質と結び付ける傾向には長い歴史的背景があるが，研究者によって扱って来た情動性の次元や想定する一般性には違いがある。最も広く一次元的に情動性を定義するのは Thomas & Chess で，彼らの「スタイル的定義」によれば，例えば，快の表出傾向が強い個人は怒りの表出傾向も強いと考えられる。しかし，このような定義は過剰に一般化し過ぎていると指摘されて来た。次に，positive な情動性と negative な情動性の２次元を提唱しているのが，Rothbart である。さらに，情動性が基本的な情動ごとにそれぞれ独立した次元であるとするのが Goldsmith & Campos で，彼らの質問紙研究によれば，恐れと怒りの次元，また，質問紙と実験室での検討の結果によれば恐れと快の次元はそれぞれ独立であった。現在では研究の進展に伴い，情動性の一般性が否定され，個別の情動性の独立性が明らかになってきている。

一方，情動性の次元としての独立性の検討には，特定の情動性を特定の表出の基準で評定すること，一つの次元につき複数の場面を設定して次元内，及び次元間の諸指標の関係を検討することが必要である。しかし，先行研究において，標準化された測定手続きを実験室場面で行い，この２点を考慮して行われた研究はない。そこで，本研究においては，Goldsmith & Rothbart によって開発された標準化された実験室気質評価バッテリー（Laboratory Temperament Assessment

Battery : LAB–TAB ; Goldsmith & Rothbart, 1992 ）を使用して，情動性の構造を検討することを第１の目的とした。検討する次元は， negative な情動性から恐れと怒り， positive な情動性から快を選択し，一つの情動性につき複数の場面を設定して検討を行った。表出された情動の評定は基本的には Izard らの開発した表情分析システム AFFEX に依拠して行った。

次のように仮説を立てた。恐れ，怒り，快の情動性は，次元内ではコンテクストの違いを越えてある一貫性をもった，独立した次元である。

さらに，個人のもつ情動性の特徴や，その次元間の関係が注目されたことは今までに無く，また，情動表出は一般に時間の経過に従って変化する現象であるにもかかわらず，従来の研究においては，情動性の検討の際に情動表出の経時的変化に注目して来たことはなかった。そこで，本研究においては，情動性の概念的枠組みを用いて，個人を単位として情動性の特徴をとらえること，さらにその際に表出の経時的変化に注目して個人の表出のパターンを分類し，その特質を検討することを第２の目的とした。

(2) 方　　法

被験者は，19－20カ月の子供とその母親50組である。

手続きは， LAB–TAB より以下の場面を選択して実施した。

恐れ：「蜘蛛場面」；リモートコントロールされた縫いぐるみの蜘蛛が子供に接近する場面
「見知らぬ人場面」；男性の見知らぬ人が子供に接近し，さらに抱き上げる場面

怒り：「バリア場面」；子供が遊んでいる玩具を透明なバリアの向こう側においてしまう場面
「拘束場面」；親が子供の腕を拘束する場面

快　：「汽車場面」；リモコンで汽車を操作する場面
「サイモン場面」；音と光を表示する玩具を見る場面
（この場面で快が表出されなかった子供が多数おり，情動喚起場面として適切ではないと判断し分析から外した）
「イナイ・イナイ・バー場面」；ついたての扉から母親が顔を出してイナイ・イナイ・バーをする場面

各場面を複数のエポックに分割し，それぞれのエポックについて，特定の情動行動の有無（各場面に複数；「有」を１点，「無」を０点とする），顔の情動表出の強度（０－３点，エポックの最強値を選択する）を評定した。有無の変数については，それぞれの変数の場面ごとの平均値について有意な内部相関の見られた変数により合成変数を算出し，その場面の有無の変数の代表値とした。強度の変数については，場面ごとのピーク値及び平均値を算出した。さらに，場面ごとの情動表出までの潜時（１秒単位）を評定した。

また，各場面のエポックごとの情動表出の強度の経時的変化に注目して，ピークに達するタイミング，ピークからの回復の仕方などから個人の反応パターンを分類した。

(3) 結果及び考察

① 情動性の構造について

まず，各場面ごとに各変数の内部相関の検討を行い，さらに，各変数ごとに場面間の相関の検討を行った。情動表出の強度に関する結果をまとめると以下の３点となる。

１．恐れ，怒り，快の表出の強度の平均値及びピーク値は，全ての場面において内部で一貫した

傾向を持つ。

2．恐れ，怒り，快の表出の強度の平均値は同じ情動性の場面間では一貫した傾向をもつが，異なる情動性の場面間では関連性が見られない。

3．恐れ，怒り，快の表出の強度のピーク値は同じ情動性の場面間では一貫した傾向をもつが，異なる情動性の場面間では関連性が見られない。

以上の結果より，恐れ，怒り，快の各情動性における強度の側面については仮説が支持され，その独立性が明らかとなった。すなわち，各個人は単に強いとか弱いといった一般的な傾向では分類できず，恐れ，怒り，快の表出の強さは情動性に特有であると考えられた。

しかし，その他の変数では，仮説での予測と異なる結果が得られた。これには以下の2点の要因が考えられた。

1．情動性の内部に階層的な構造があり，各々の下位構造の独立性が状況特異的であること。

2．本研究において評定した指標に概念的な重なりが存在していたこと。

② 情動性の表出パターンの個人の特徴について

各場面のエポックごとの情動表出の強度の経時的変化に注目して，個人の表出パターンを，ピークに達するタイミング，ピークからの回復の仕方などに注目して分類した。

結果によると，まず，情動表出のピークからの回復のパターンの個人内の類似性は，同じ情動性の組み合わせのほうが異なる情動性の組み合わせよりも高く，個人が情動ごとにまとまった表出のパターンを持っている可能性が示唆された。

また，個人の表出のパターンは情動性に特有であり，各々のパターンにおいて個人の特徴が現れる側面も情動性ごとに異なっていた。すなわち，恐れについては，始めにピークに達する表出パターンを示す者が多いが，そのピークの強度に個人の特徴が現れていた。怒りについては，後から表出のピークに達し，そのピーク値は強く，しかも維持されるというパターンを示す者が多いが，ピークに達するまでの潜時に個人の特色が見られた。快については，早い時間に強いピークに達するパターンを示す者が多いが，ピークの持続時間に個人の特色が現れていた。特に，エポックごとの得点を場面単位で平均してしまうと，強度の特徴と思われていたものが，潜時や持続時間といった時間的特徴の影響を強く受ける事が明らかになったことは，興味深い結果であると思われる。

③ 全体的考察

まず，情動性の研究の際に一般に行われる方法のように，ある場面をエポックごとに分割して表出の強度を測定し，それを場面単位に平均してしまうと，その平均値には，強度と持続時間の二側面が含まれてしまう事があらためて明らかになった。この二側面は特に情動性の構造を検討する際には区別されるべきであるが，先行研究においてこのことが指摘されて来たことはなかった。

次に，恐れ，快の情動性の次元は，本研究及び，先行研究から乳児期を通して独立していると考えられる。しかし，恐れと怒りについては結果が一貫しておらず，本研究を含めた10カ月以降の乳児を対象とした研究では恐れと怒りの情動性の次元の独立性が報告され，それ以前の乳児を対象とした研究ではこの二次元は同一次元に還元されるという結果が報告されていた。しかし，恐れと怒りが同一次元に還元されるとした代表的な研究者である Rothbart は，恐れも怒りも dis-

tress を用いて評定して研究を行っているが，このように恐れと怒りの両者を distress によって評定するのは適切ではないと考えられる。すなわち，このような評定方法を使用すれば，恐れと怒りを個別に評定した事にはならず，単に「distress のなりやすさ」といった次元を評定したに過ぎないのである。しかし，幼い乳児においては恐れや怒りの制御は困難であり，distress の表出と常に結び付いている。発達に伴ってこれらの制御能力が獲得されて来ると，恐れと怒りの独立性が明らかになって来るのである。このことから，乳児期初期においては，恐れと怒りを同一次元に還元するのではなく，一般的な「distress のなりやすさ」といった次元で評定する方が妥当であると思われた。乳児期後半からは，恐れと怒りの独立性は一貫していると思われる。

また，情動性の内部に階層構造があり，それらの下位構造の関係が状況特異的であることが示された。この結果は，情動性における複数の側面が選択され，時間，強度の両側面で補いあって全体としての表出となっている可能性を示唆するものである。そうであるならば，情動性の下位構造をとらえる際に，その相互の関係は静的なものとしてではなく，動的な関係としてとらえる必要がある。このようなダイナミックな変化の在り方に個人の情動性の特徴が表されて来るものと思われる。

さらに，情動表出の経時的変化に注目して個人の表出パターンを分類することによってとらえられた，恐れ，怒り，快の情動性に特有の表出パターンは，一般的に直感的に把握された「恐がり」「怒りっぽい」などの語で示される特徴と極めて類似しており，子供の特徴の現象的な把握に対する気質概念の有用性を示すものであると考えられる。

(4) 今後の課題

本研究においては，階層的な内部構造を持つものとしての情動性をとらえる視点が明確ではなく，その評定についての概念的な重なりが存在した。今後はこの重なりを無くして評定し，情動性の内部構造をより明らかにする必要がある。また，その下位構造の相互関係をとらえる際にそのダイナミックなかかわりを検討する視点を持たなくてはならない。すなわち，情動表出における顔や運動の表出の相互の経時的変化を詳しく検討することによって，情動性という一つのまとまったシステムのあり方を明らかにして行くことができると考える。

さらに，分析の視点を個人に向けることも必要である。気質次元において実際に子供が持つ特徴及びその次元間における関係をさらに検討して行きたい。この点に関しては先行研究もほとんど無く，本研究も探索的な域を出ていない。しかし，個人差に言及する概念としての気質研究には必要な領域であると思われる。

最後に，本研究は一時点でのデータのみであったために情動性の特徴の安定性については検討されていない。気質概念は比較的安定した個人の特徴をとらえる枠組みとして注目されている。各の情動性についても縦断的なデータによりその安定性や発達的変化を検討することが望まれる。